朝鮮黄海道載寧鐵山は明治四十三年農商務省の有に歸して以來、年々二萬噸乃至七萬噸の鑛石を產し、既に百萬噸の鑛石を產出せり。

地質は上部大同層にして白堊紀(?)の凝灰質を帶べる頁岩砂岩、礫岩及凝灰岩より成り中に扁桃狀の石灰岩を夾在す。石灰岩の上下の頁岩中には植物化石を產す。本層の走向は東西乃至北東、傾斜北方(平均四十度なり。本層は鐵山の南方一里に於て古生代硅岩及雲母粘板岩を不整合に被覆し、又西方には黑雲母花崗岩の大塊あり、大同層は此の花崗岩の一部の噴出に際し沈澱したる凝灰質岩石ならん、而して又花崗岩の一部は大同層の沈澱後に進入し此に交代作用を及ぼしたるものなり。猶ほ花崗岩進入に伴ひ之より分化射出せる玢岩狀岩脈の貫入せるものあり。

鐵鑛の產出狀態　鐵鑛產地は載寧鑛山、同蛤坑、同筐山、南渠面蔘金山、牛頭川面黃山洞、同未力街上小串の六箇所にして何れも大同層を母岩とし花崗岩に近く排列す。鐵鑛は多く褐鐵鑛なれども時に蛤坑に於ける如く雲母鐵鑛として產す鑛石の形狀狀態に次の四種あり、一、重晶石を伴ひ腎狀又は。縞狀構造をなすもの　二、重晶石を伴はず、不規則塊狀をなすもの　三、大小礫狀をなすもの　四、表土中に礫狀をなすもの。

鑛床の成因　大同層中の石灰岩が南西方に隣接せる花崗岩の進入に伴ひ分化進出せる玢岩岩脈に貫かれし際竝に其の後此の花崗岩岩漿水より浸出せる多量の含鐵鑛液の爲めに交代作用を受けて生ぜるものなり、其の結果多量の赤鐵鑛及び菱鐵鑛を生じ更にその後の露天化作用に依り二次的に褐鐵鑛を生成し大鑛床を形成せるものなり。鑛床母岩をなす石灰岩は特に鐵分を多く含有するものにはあらず、故に鑛床をなす褐鐵鑛が單に石灰岩の風化により凝聚せるものとは考ふるを得ず。載寧の鐵鑛は隣接せる花崗岩の岩漿より直接間接に鑛液の供給を受けて交代的に生成せるものなり。

從來載寧及び安岳の鐵鑛は鑛脈を爲し水成岩と共に沈澱せるものなりとされたるを本論文にて交代鑛床なりと論ぜるものなり。(中村)

新著紹介

○支那研究　西湖より包頭まで　藤田元春著　四六版本　文四二三頁　大阪博多成象堂發行　大正十五年五月　定價貳圓七〇錢

鶴岡藤田君は素から支那歷史地理學の專攻家である。大正十三年八月から十月にかけて二箇月間外務省の命を奉じて楊子江、京漢線、汴洛線、京綏線、北部津浦線、山東線及南滿洲を急いで旅した紀行に托して、其の路線の歷史地理と地學的觀察を詳記したものである。其の歷史地理を說き、人文を論ずること、かいなでの旅行家の考へも及ばぬ位犀利なものがある。之は年來の蘊蓄が迸り出たからである。地學家の紀

行の出版されることが甚だ寥々たる時曩には山崎博士の西洋、又南洋あり、今鶴岡氏の支那紀行があつて併せて世界紀行が完成された觀がある。本書の最も特異とする所は水系殊に黄河の源支、舊流については疾走する車内に在つても數來の細流を見のがさずして一々其に地學上將た歴史上の釋明を加へた所にある。勢力絶倫の地學者でなければかうも觀察眼を不斷に開いて居ることは出來ない。獨り本書が支那地誌に關し大なる貢献をしたばかりでなく、人文に關した經驗を肩の凝らぬ筆で織り込んだことは著者の性格の然らしむる所か或は文才の然らしむる所かは知らないが、ともかく本書の壓卷は洛陽に中華現代の怪傑吳佩孚を訪うて其客となり、老酒の饗を享け、「周禮が支那の憲法だ」と講釋されて感服して了つた一章である。本書には寫眞と地圖との挿圖が百二十七も入つて居ることは地理學書としてよく其の體を具へたものと云へる。たゞ惜むらくは各種の數字に途方もない誤植？の甚だ多いことであるがこれは讀む人をして誤まらしめぬ程判り切つた瑕であるから却つて愛嬌になるとも言へる。紹介者は本書を地學愛好家は勿論一般江湖に薦めるに吝かならぬものである。(N)

○鑛物岩石鑑定表覽　大櫂良一著　東京市神田區南神保町九番地太陽堂發行　幅四寸、長六寸、八十七頁小册子　定價金壹圓貳拾錢　大正十五年六月發行

此種の書册に最も痛切に要求せらるるは、使用や携帶に便で、鑑定に適切な特徴々要點が、成るべく簡潔に洩れなく網羅せられて、ムダの無い事である。著者は其序文に記載せる通り、深く此點に意を注いで、苦心編纂したもので、鑛物の鑑別に往々見誤り易い光澤に重きを置かず、硬さによりて分類したのは、新機軸を發揮したもので、著者多年教授の經驗から得た貴い果實である、又鑛物の種類を重要なもの百二種に限つたのも、前記の主旨から善く會得が出來、鑛物の本邦名と英名とを表の兩端に置たのは、氣が利いて居る。屈折率や劈開、比重、熔融度を各別に表示し、鑛石一覽に主要成分の含有量や、鑛床を表示したなど、克く要領を得て簡便である、主要造岩鑛物や岩石鑑定表にも著者の苦心と創見が歴々窺はるる、此書の實用上大に役に立つのに驚喜する人々は、僅々百頁に滿たぬ小册子中、鑛物、岩石、鑛石に關する重要なる諸性質を巧に纏め込んだ著者の勞を深謝せねばならぬ(愛石生)

○大阪府鄉土地理　藤本好著　菊版一一七頁　網目寫眞版十葉　地圖二葉　大正十五年四月發行　大阪市東成區生野國分町宮田操泉堂　定價一圓

本書は中等學校の地理科の參考書として編纂されたものである。然し其の内容を見るに克く近代の地理學の趨向に鑑みて自然地理より人文地理に亙つて其の相關の理を明にして居る。且つ間々歴史地理に亙つて現代の地理のよつて來る所を明にして居る。地理學の面白味の最も多いのは鄉土地理である。殊に日本第一の商工業都市大阪を中心とした大阪府の地理現象の影響する所は無論大阪府に限られて居らず、日本全

部若くは東亞に及んで居る。紹介者はこの外形の教科書らしい地理書から幾多の新しい地理的説明を見出して莞爾として之を江湖に薦めて我が大大阪の地理が國民に理解されるのを望むのである。之を教科書に用ひても他の教科書の樣に説明を補ふ事は餘程力量がいる樣にも思はれる。それは此の書の説明が地理學的の正確さと綾とを十二分に持つてゐるからである。若し夫れ行文のどこかに關東人の眼を遮ぎる點のあるに至つてはそれが鄕土の地方色を持つて居ることを示して居るといふ點で面白く感ぜらるゝ所である。小川博士の本書の序文に言はれて居る樣に同種の册子が各府縣から出る嚆矢となつて全國地理教育界の新風潮を起すことを望むこと切である。(N)

Stieler's Atlas of Modern Geography

(Tenth-Century-Edition) 254 Maps & inlets on 108 Sheets 2 Volumes. Justus Perthes: Gotha. Completely revised & largely redrawn under the direction of Prof. Dr. H. Haack. 55yen.

Stieler 氏の Atlas は一八二三年の初版以來今日世紀號たる第十版を刊行するまで年を閱する事約百年である。然し今度改版された世紀號程大補修を加へられたことは未だ曾てなかつた。殆んど全部が新らしい調査の下に改作改刻されたもので舊版を使用してゐるものはほんの數葉に過ぎない。監修者は Dr. H. Haack で翼に Dr. A. Petermann の下で製圖に從事してゐた人であつて博士の歿後初めて全卷監修の任に當つて前後十五年間の歲月を費して漸やく完成したのが、この地圖帖である。

その製圖學上から見た結構は眞に完備にちかいものであつて、絕大なる努力の結晶であることが窺はれる。これに從事する製圖家は監修者たる H. Haack 博士を初め Sydow, Habenicht, Vogel, Schleifer など練達の製圖家十數名が分擔して作圖と校訂に從事してゐる、またこれを鐫刻する彫刻師も二十三名の多きに上り、中でもコーゲル、ライヘンバツヘル氏の平面彫刻の手法やクラーメル、メツセルシユミツト兩氏の暈滃彫刻の手際は益々冴えて、地貌の表現に格段の進歩を見せてゐる。

地圖全體が委く wissenschaftlich に出來てゐることは今更ではなく、境界線や地形の正確さもまた拳々するの要はないが、地類記號 (Landsurface features) の增補、(例へば Raverfield. Bogs. Terai. 等)註記字體 (Style of Letters) の統一、都邑記號 (Classifications of Towns) を全部最新調査の下に改正されたなど殆んど舊形を止めない位に改修されてある、尙ほ海洋學上の新らしい研究を普れく取り入れて海部の深淺に、海流等より岩礁に至るまで綿密な注意を以て補定されてゐることは實に驚く可きものがある。更に一段の便を思はしむるものは、每圖每にその地圖の餘白に必要なる記號全部を挿入してあることで、これは地圖に親しむ者の最も利便とするところである、多くの塲合記號全部を記憶して、所要の地圖に臨むことの出來難いことは Atlas を讀むものの

等しく感ずることであつて、これを除去されたのは問題は小だが特筆すべきことと思ふ。

この世界的大作を部分的に亙つて、批評することは、容易なことでないので、たゞ概括的の紹介に止めて置くが、日本の部だけに就て披見するに第九版に於て既に Barich が地方別として、府縣所在と府縣名と同一なる名稱のものは、Underline を以て兼稱せしめ、相違してゐるものには Kanasawa (Ischikawa) のやうな註記のし方をして區別するなどして相當に豊富な地名を入れることに留意して居るが、世紀版に於てシュライフェルやフラウデが舊區劃たる國名を使用したのはどういふ理かと思はれる。また、千島列島の Kurilen oder Tschi Is. のやうな、遠州灘の Totomi Bucht 伊勢海の Owari B. Jatsuschiro Mere のやうな何とはなしにそぐはないものの多くあることは、云はゞ寧ろ日本の現在の狀態を如實に語つてゐるのではないかとさへ思はれる。それは最も地理學的な、そして最も現在に即した、今日の文明を語るに足るだけの歐文日本地圖を以て、我が國が世界に紹介されてゐない證左とも見らるるのである。然しまたそういつた、まとまつたもののない中でこれだけの全圖を纏めたことも偉としなければなるまいと思ふ。（木崎龍尾）

雜報

○江戸川に發掘された象

七月三日千葉縣市川町に於て江戸川の新しき橋の工事中左岸より二番目の橋臺下三十尺より象の齒、骨片等拾數箇を掘り出した。此あたり沖積層の砂、粘土で其下に洪積世の泥土層がありカキや漂木が含まれてゐた。象は此層の上部にあつたのである。市川町は沖積世になつてしばらく海であつたらしく左岸堤防下の最上部層は黄色砂で現今上總あたりの東京灣に棲む貝類とほゞ同じ種類が夥しくある。今日江戸川の川口より船橋千葉への海岸はかなり淡水の混入が多い所に好み棲む貝類が見られる。して見ると以前は江戸川は此處に流れ注いではゐなかつたのではあるまいか。また貝と共に石器時代の土器がでた事と市川以北の臺地に貝塚の多い事と併せ考へて此貝層は石器時代の海の沈積と思はれる。東京下町の最上部貝層などと同じくきわめて近く陸地に化した。有史後江戸川は利根川の本流であつた事があつたが其發達はあまり古くはないと考へられる。象は遠州佐濱に出たナウマン象(Elephas Namadicus Naumanni Makiyama) に同定し得るが少しく異る點がある。出た材料は上の左眞臼齒第二番と下の臼齒不完全標本二箇其他十數箇の破損した骨片で中には他獸のも混じてゐる。最も完全なるは左上第二臼齒一箇で長さ二十糎に十四枚の齒葉と前後一づつのタロンがある。高さは前より七枚目の齒葉にて二十糎幅